

## 21 わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明 (その2)

橋本 明

愛知県立大学

わが国における精神科ソーシャルワーカー (PSW) の登場は、村松常雄の取組みに負うところが大きい。1933年から1935年にかけてアメリカに留学した村松 (当時、東京帝国大学医学部講師) は、当地における精神衛生事業とその担い手としてのPSWの役割に着目していた。1936年3月に創設された東大医学部附属脳研究室では、村松の考案により児童部に“social worker”を配置し、相談や家庭訪問を行わせていたという。

だが、PSWの本格的な導入は第二次世界大戦終結後である。1948年4月、将来的に国立の“Mental Hygiene Center”とすることを条件に国立国府台病院の院長に就任した村松は、ここに国立病院で最初の医療社会事業部門を設置した。臨床チームの一員として、看護婦を「社会事業婦」と呼んで配置し、これがわが国におけるPSWの嚆矢といわれている (正式には、当時のPSWの橋本繁子氏は雇員、関川美代氏は看護婦だったという)。

1950年3月、名古屋大学医学部精神科教授に着任した村松は医療社会事業部の設置を文部省に要求したが認められず、アメリカのロックフェラー財団から“Training Center in Psychiatry”の整備費として3年間にわたる助成金7,000ドルを得て、臨床心理部門と社会事業部門をつくった。後者のスタッフとして1951年7月、国立国府台病院から金子寿子氏がPSWとして採用された。

村松の構想はPSWの教育にもわたっていた。彼が「ソーシャル・ケースワーカー養成の殿堂」とすべくその設立に奔走したのが1953年に発足した中部社会事業短期大学 (現在の日本福祉大学) である。当時、社会福祉従事者を養成する専門教育機関は、東京と大阪に1ヶ所ずつあるのみだった。宗教家で学園創設者の鈴木修学を支え、村松は大学の基本構想、カリキュラム、教員計画に中心的な役割を果たした。1955年に最初の卒業生が誕生し、名古屋とその周辺の病院や施設にPSWとして就職した者は多い。

一方、名古屋大学精神科では1953年からフルブライト奨学生として2年間医局に滞在していたG・デボス氏の夫人を囲んでケースワークの研究会をはじめている。これが東海地方のPSW研究会の先鞭をなし、さらにその後全国各地でつくられるPSW組織の形成へと連なっていく。こうしたPSWの職業集団としての意識を反映して、1963年8月、全国から76人が参加して日本社会事業大学でPSW全国集會が開かれた。さらに翌1964年11月には「日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会 (後の日本精神保健福祉士協会)」が発足した。

ところで、上記の金子氏は名古屋大学精神科に赴任した当初から「職業的アイデンティティが不確実であった」と述懐しているが、1960年代においてもPSWの職種としてのアイデンティティをめぐる議論が活発に行われていた。1965年5月、第1回精神医学ソーシャル・ワーカー全国大会が東京で行われた。ここで岡田靖雄氏 (当時、東京都立松沢病院) が行った特別講演「精神医療におけるPSW」の内容を、「PSW不要論」と受け取るPSWらは、「反論・ソーシャルワーカーは果たして不要か」 (坪上宏、当時、国立精神衛生研究所) と応じた。しかし、この時期のPSWは一つの分岐点に立っていた。初期のPSWは人間関係論的、心理社会的なクライアントへの働きかけを指向していた。だが、いまや福祉的なアプローチへの転換が模索されていたのである。

その後の日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会は、「Y問題」 (この協会に所属するPSWがYという人物を精神病であるという予断から強制入院に導いた問題) の処理をめぐる紛糾し、1982年の「精神障害者の社会的復権と福祉のための専門的・社会的活動を進める」という当該協会の札幌宣言に事態収拾の着地点を求めた。